

論文

特別支援学校知的障害者用音楽科教科書の教材分析

齋藤 一 雄*

2011年に特別支援学校知的障害者用音楽科教科書(☆本)が改訂された。改訂の方針は「新たな教材を選定する」「楽器をより多く扱えるようにする」などである。調性、拍子、速度、音域、教材選択の観点などについては、特に大きな変化はみられなかったが、楽曲を題材ごとにまとめた、楽器を扱う教材をまとめた題材名が多い、新掲載曲が多いなどの変化があった。題材名は様々な表現をとっているが、ねらいや音楽活動がわかるようになっており、子どもの実態や生活、季節、音楽活動の目的やねらいにそって配列していた。また、教材選択の視点について、特に、感情や美などの情操に関する視点、人とのかかわりなどの自立活動との関連を考えた視点があげられていた点がこれまでと異なる。さらに、☆本に掲載された多数の教材を実践で活用することが必要だと考える。

キーワード：☆本、教科書解説、教材分析

I はじめに

特別支援学校(知的障害)では、日常的な活動や学校行事などで、歌や器楽及び身体表現などが取り入れられている。音楽の授業でも、子どもたちの実態に応じて、様々な教材が使用され、学習活動が展開されている。音楽科の教科書としては、文部科学省検定教科書(以下、検定本)、文部科学省著作教科書(以下、☆本)、学校教育法附則第9条による一般用図書を採択することができる。

☆本は1964年に作成され、その後、学習指導要領の改訂に伴い、1985年、1995年、2001年、2011年に部分的に改訂されている。☆本には、小学部用の『おんがく☆』『おんがく☆☆』『おんがく☆☆☆』、中学部用として『音楽☆☆☆☆』の4種がある。また、教科書の使い方を示した『おんがく☆ おんがく☆☆ おんがく☆☆☆教科書解説』と『音楽☆☆☆☆教科書解説』が作成されている(文部科学省、2012)。

ところが、教師のなかには☆本があることすら知らない場合があり、指導書を持っている教師も少なく、活用されていない状況がみられるという(齋藤、1996)。齋藤(2005)は、全国の国立の附属養護学校小学部の教員を対象に調査したところ、☆本の存在を知らない教師は少なかったが、活用していない教師は多かったと報告している。しかし、実際に取り上げている教材名を聞くと、☆本に掲載されているものも多かった。

また、齋藤・星名(1996)は、1996年に改訂された小学部用『おんがく教科書指導書』にある「教科書掲載教材の分析表」から、調性や拍子、速度、音域、教材選択の観点や教材選択の基準を集計し、『おんがく☆』～『おんがく☆☆☆』は、子どもたちの認識や音楽の発達段階を配慮して作成されていることを示唆している。さらに、2002年に改訂された『おんがく☆ おんがく☆☆ おんがく☆☆☆教科書解説』にある「教科書掲載教材の分析表」を比較すると、同様の傾向がみられた(齋藤、2003)が、分析表にはない観点、小節数やリズムパターンの種

類をみてもみると、奇数の小節の教材が少ないこと、1・3・8小節で一つのリズムパターンとなっている教材があることがわかった。

その後、初めての特別支援学校学習指導要領が示され、2011年に☆本は大きく改訂された。その改訂の基本方針には、「教科書で取扱う曲目は、児童の興味・関心のあること、情操を豊かにすること、情緒の安定を図ること、身体表現を活発にすること、自己表現活動ができること、創造的な音楽活動ができることなどを考慮し、新たな教材を選定する。その際、特別支援学校において多く使用されている曲や知的発達の程度等が多様な児童が親しみをもてる曲を取り入れる」「知的発達の程度等が多様な児童が親しみ、楽器をより多く扱えるようにするとともに、さし絵は児童が興味・関心をもち、より学習意欲が高まるように改める」などがあげられている(文部科学省、2011b)。

特別支援学校知的障害者用の☆本は、小学部用の『おんがく☆』『おんがく☆☆』『おんがく☆☆☆』、中学部用の『音楽☆☆☆☆』の4種であり、主に楽曲(61～104曲前後)とさし絵で構成されているところに変わりはないが、楽曲の入れ替えが多少あり、楽曲を題材ごとにまとめて示している点で変化があった。

また、解説書(文部科学省、2011b)には、基本的な考え方や重複障害児の指導、各教科書別に教材の活用の仕方、さらに、調性、拍子、速度、音域、教材選択の観点や基準が示されていることから、新しく改訂された音楽科の☆本に掲載されている楽曲について、それぞれの調性、拍子、テンポ、音域、及び指導の領域、配列の仕方などの視点から分析を試みた。

II 目的

特別支援学校音楽科教科書に掲載された楽曲の分析をとおして、『おんがく☆』～『音楽☆☆☆☆』の教科書の段階的な発展性や有効な活用の方向性を探る。

* 上越教育大学大学院学校教育研究科

表1 楽曲をまとめて示した題材名

おんがく☆	おんがく☆☆	おんがく☆☆☆	音楽☆☆☆☆
おととあそぼう はるの うた たのしい いちにち げんきな こえで むかいあって たのしく てあそびしよう みみを すまそう1 なつの うた みんな なかよく どうぶつに なって みみを すまそう2 あきの うた うたって おどって1 みみを すまそう3 ふゆの うた がっきを ならそう うたって おどって2 わらべうた えをみて うたおう えをみて おはなしを きこう はる・なつ・あき・ふゆの うた こっか	はるのうた ふれて あそんで えかきうた せんせいと やりとり みみを すまそう だがっきに ちょうせん なつを かんじて みんなで おとまり にっぽんのしらべにのって おんがくで おはなし せいかつの なかで あきを かんじて うんどうかい ひょうげん してみよう りずむで あそぼう ひびきあいを たのしもう ふゆの うた けんばんは一もにかにちょうせん ようすを おもいうかべて みんなで つながろう にっぽんの うた こっか	はるの うた たのしく うたおう リズムに のろう なつの うた キャンプの歌 なかよく うたおう ならして あそぼう いろいろな おんがくをきこう ひょうげん しよう あきの うた がっそう しよう みんなで うたおう わらべうた ふゆの うた そつぎょうの うた がっきしようかい 国歌	みんなで歌おう I 春を感じよう 日本の歌 I マーチをきこう きいて表現しよう リズムにのって I 英語で歌おう ひびきを楽しもう ことばのアンサンブル 夏を歌おう いろいろな楽器の音色をあげわおう キャンプの歌 郷土の音楽 日本の楽器と音楽 世界の音楽 みんなで歌おう II リズムにのって II 日本の歌 II オーケストラの音楽をきこう 冬の音楽を楽しもう 物語と音楽 リコーダーで演奏しよう コンピュータで「マイソング」をつくらう みんなで歌おう II 国歌
(22)	(22)	(17)	(25)

III 方法

☆本及び教科書解説書に掲載されている楽曲をまとめて示した題材名と「教科書掲載教材の分析表」にある、調性、拍子、速度、音域、教材選択の観点や視点などから、各☆本の特徴について曲数や割合を中心に分析を行う。

IV 結果と考察

1 楽曲をまとめて示した題材名

今回改訂された☆本では、たとえば、〈おととあそぼう〉〈てあそびしよう〉〈うたっておどって〉〈たのしいいちにち〉〈はるのうた〉〈なつをかんじて〉〈あきのうた〉〈冬の音楽を楽しもう〉〈がっきをならそう〉〈ひびきあいをたのしもう〉〈ひょうげんしよう〉〈みみをすまそう〉〈オーケストラの音楽をきこう〉〈物語と音楽〉など、楽曲を題材ごとにまとめて示している(表1)。題材名は様々な表現の仕方をとっているが、どのような音楽活動なのか、どのようなねらいのかがわかるような題材名となっており、季節や生活など年間の学校生活をみとおした配列についても考慮していることがわかる。

しかし、各☆本によって、若干題材名の表現の仕方が異なり、内容がわかりにくいものもある。たとえば、「音と遊ぼう」「みんななかよく」「触れて遊んで」「夏を感じて」「音楽でお話」「表現してみよう」「みんなでつながろう」「リズムにのろう」「ことばのアンサンブル」などである。しかし、もともとは歌集として作成され、教材集として編集されてきた☆本としては、教材をあるまとまりで示すことによって、子どもの実態や生活、季節、音楽活動の目的やねらいに応じた選択がしやすくなったと考えることもできる。その点では、「楽しい一日」「向かい合って楽しく」「みんななかよく」「どうぶつになって」「触れて遊んで」「先生とやりとり」「みんなでお泊まり」「みんなでつながろう」など、特徴のある学校生活や人とのかわりなどの自立活動との関連がみられる題材名もある。

また、改訂の基本方針には、「教科書で取扱う曲目は、児童の興味・関心のあること、情操を豊かにすること、情緒の安定

を図ること、身体表現を活発にすること、自己表現活動ができること、創造的な音楽活動ができることなどを考慮し、新たな教材を選定する」とあるように、〈うたっておどって〉〈たのしいいちにち〉〈冬の音楽を楽しもう〉〈ひびきあいをたのしもう〉〈ひょうげんしよう〉〈みみをすまそう〉〈オーケストラの音楽をきこう〉〈物語と音楽〉など、身体表現や自己表現活動、創造的な音楽活動などを考慮した新たな教材を含んだ題材がまとめて示してある。

また、改訂の基本方針に「知的発達程度等が多様な児童が親しみ、楽器をより多く扱えるようにする」とあるように、たとえば、〈おととあそぼう〉〈みみをすまそう〉〈がっきをならそう〉〈えをみておはなしをきこう〉〈だがっきにちょうせん〉〈ひびきあいをたのしもう〉〈けんばんは一もにかにちょうせん〉〈がっそうをしよう〉〈リコーダーで演奏しよう〉など、楽器を扱う教材をまとめた題材が多くなっている。

2 調性について

教科書掲載の教材には、ハ長調とヘ長調の楽曲が多く、次にト長調と日本旋法の楽曲が多くあった(図1)。また、調性が記述されていない楽曲も少なくなく、特に、音楽☆☆☆☆に多くみられた。記述されていない楽曲は、鑑賞教材、身体表現の教材、日本民謡、日本の伝統音楽、ガムラン、創作のための教材であった。音楽☆☆☆☆では、調性が記述されていなかった

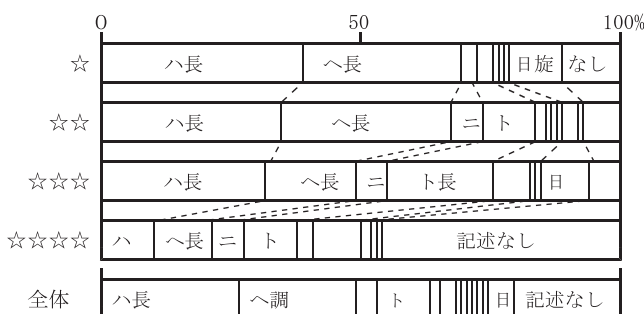


図1 各☆本の調性別の曲の割合

楽曲の中では、日本民謡が20曲、日本の伝統音楽やお囃子などが6曲と、日本旋法にかかわる楽曲が多かった。おんがく☆とおんがく☆☆☆では、童歌が日本旋法として記述されていた。

また、ハ長調とヘ長調の楽曲はおんがく☆とおんがく☆☆に多く、おんがく☆☆☆、音楽☆☆☆☆では少なくなる傾向がみられ、ト長調はじめ、変ホ長調、変ロ長調、ハ短調、イ短調などの楽曲が多くなっていった。幅広い楽曲が教材として掲載されていることがわかる。

3 拍子について

教科書掲載の教材には、4分の4拍子の楽曲が多く、次に4分の2拍子の楽曲が多く、次いで4分の3拍子の楽曲が多かったが、8分の6拍子、2分の2拍子、8分の3拍子の楽曲は少なかった(図2)。おんがく☆☆☆では、4分の2拍子の楽曲が少なくなり、音楽☆☆☆☆では、4分の2拍子と4分の4拍子の楽曲が少なくなり、4分の3拍子の楽曲と記述されていない楽曲が多くなり、鑑賞教材、日本の伝統音楽、創作のための教材には拍子が記述されていなかった。

4分の4拍子と4分の2拍子の楽曲は、2拍子の系統でわかりやすい楽曲が多いと考えられる。

4 速度について

教科書掲載の教材には、速度について記述されていない楽曲が多く、特におんがく☆に多く、おんがく☆☆とおんがく☆☆☆では少なくなるが、音楽☆☆☆☆で多くなっている(図3)。おんがく☆では、遊びや身体表現、鑑賞教材、日本の伝統音楽、創作のための教材で記述されていないことが多く、音楽☆☆☆☆では、鑑賞教材、日本の伝統音楽、創作のための教材で記述されていないことが多かった。

全体としては、100~140までの速度の楽曲が多く、おんがく☆☆☆では140よりも速い楽曲もあり、音楽☆☆☆☆では遅い速度の楽曲の割合がやや多くなっている。全体としては、遅い

楽曲から速い楽曲まで、幅広く掲載されていることがわかる。

5 音域について

各教材の音域については、最低音と最高音が記載されていた。各☆本の音域(最低音)別の曲の割合(図4)をみると、ハ・の教材が最も多く、おんがく☆から音楽☆☆☆☆になるにつれて少なくなっている。逆に、ハ・よりも低い教材や高い教材の割合が多くなっていることがわかる。しかし、おんがく☆☆☆と音楽☆☆☆☆には記載されていない教材が多く、鑑賞教材、日本の伝統音楽、創作のための教材であった。

各☆本の音域(最高音)別の曲の割合(図5)をみると、ハ・・と二・・の教材が最も多く、ハ・・の教材はおんがく☆から音楽☆☆☆☆になるにつれて少なくなっている。逆に、二・・の教材はおんがく☆よりもおんがく☆☆☆~音楽☆☆☆☆において多くなっていることがわかる。しかし、おんがく☆☆☆と音楽☆☆☆☆には記載されていない教材が多く、鑑賞教材、日本の伝統音楽、創作のための教材であった。

6 教材選択の観点について

教材選択の観点については、歌唱、器楽、身体表現、鑑賞の教材として分類されている曲数の割合を算出した。特別支援学校(知的障害)の音楽科における教材選択の観点は、小学部1段階は音楽遊び、小学部2・3段階と中学部では歌唱、器楽、身体表現、鑑賞となっているが、音楽遊びの教材についても歌唱、器楽、身体表現、鑑賞の観点で分類されている。「教科書掲載教材の分析表」には、教材選択の主たる観点の教材については◎、合わせて観点となる教材については○がついている。そこで、まず、☆本ごとに教材選択の観点別の曲数を集計し、図6に示した。次に、教材選択の主たる観点別に集計し、その割合を算出した(☆☆☆の鑑賞については、主たる観点が他の教材と重複して分類されている楽曲があった)。その結果は図7に示した。

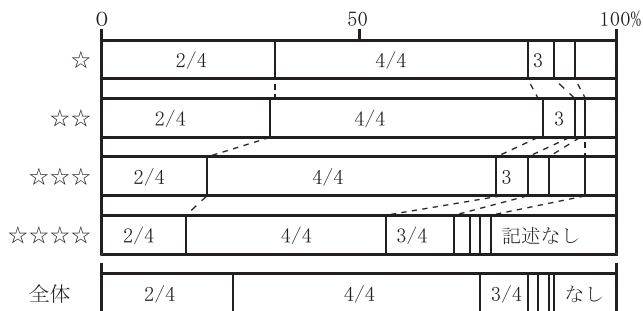


図2 各☆本の拍子別の曲の割合

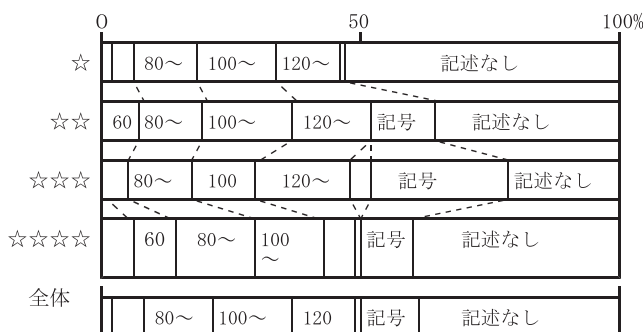


図3 各☆本の速度別の曲の割合

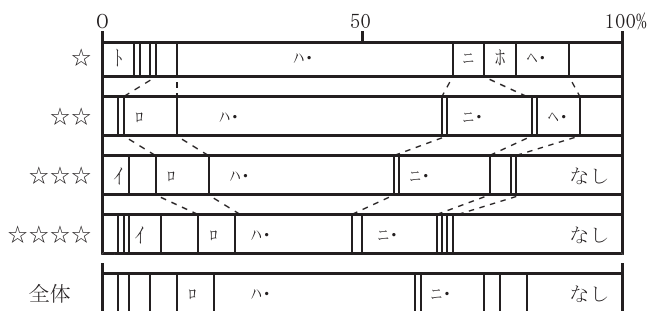


図4 各☆本の音域(最低音)別の曲の割合

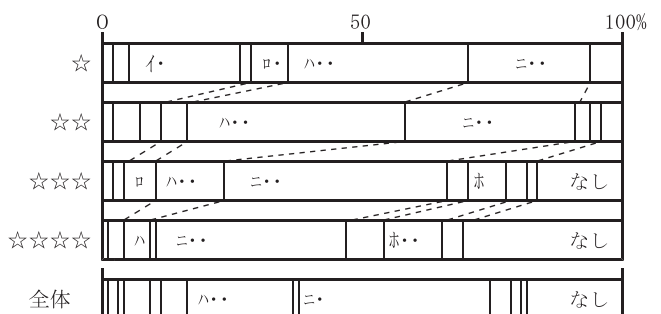


図5 各☆本の音域(最高音)別の曲の割合

表2 各☆本の教材選択の視点の数

おんがく☆	おんがく☆☆	おんがく☆☆☆	音楽☆☆☆☆
遊び・遊び歌14 季節・季節の歌14 行事の歌2	遊び・わらべ歌18 季節・季節の歌9 行事の歌8 世界の歌1 動物6 交互唱・輪唱6	遊び・遊び歌10 季節5 行事9 生活7 自然6 エコーソング6	手話7 キャンプソング3 日本の歌9 日本の民謡18 世界の民謡11 英語・ドイツ語の歌4 合唱・エコーソング14 計66 (合計187)
計30	計48	計43	
楽器9	楽器6 リズム奏11 奏法・交互奏13 合奏5	太鼓・打楽器・鍵盤楽器7 リズムにのって9 始めと終わり・和音・音階・効果音6 合奏3	楽器13 器楽合奏3
計9	計35	計25	計16 (合計85)
身体表現28	身体表現4	身体表現6	身体表現17 (合計55)
発声・コミュニケーション24	発語3	交流17	
鑑賞8 物語2	鑑賞5 劇6	鑑賞13 劇5 美・感情8	鑑賞11 物語と音楽・劇4 計15 (合計62)
計10	計11	計26	
視覚教材7	共通教材7		創作・即興表現7
	記述なし21	記述なし1	記述なし3 (合計25)
(計108)	(計129)	(計118)	(計124)

図6から、歌唱を教材選択の観点とする教材の曲が多く、次に、身体表現を教材選択の観点とする教材の曲が多い。歌唱と身体表現を教材選択の観点とする教材よりも、器楽と鑑賞を教材選択の観点とする教材の曲は少ないが、各☆本には12~35曲もの教材が掲載されている。

観点別にみると、歌唱では◎のついた主たる教材選択の観点の曲が☆から☆☆☆☆へと多くなり、逆に○がついた合わせて教材選択の観点としている曲が少なくなっている。身体表現では歌唱とは逆に、◎のついた主たる教材選択の観点の曲が☆から☆☆☆☆へと少なくなっているが、○がついた合わせて教材選択の観点としている曲は☆☆~☆☆☆☆において少なくなることはみられない。このことは、小学部第1段階の☆本においては、歌唱、器楽、身体表現、鑑賞の観点として分けず、音楽遊びとしていることから、発達の未分化な段階の児童の実態を考慮したものとなっていることが示唆できる。逆に、

身体表現の教材選択の観点は、中学部においても少なくならず、身体表現と歌唱・器楽と合わせて指導することの必要性を示していると考えられる。

また、☆☆では、○のついた合わせて教材選択の観点としている曲数が82曲と多く、他の☆本は52~59曲であった。小学部第2段階の児童の実態として、様々な音楽活動を組み合わせて行いながら、音楽経験を広げていくことができるようにという配慮がうかがえる。

次に、図7から、☆本全体の教材の約47%が歌唱教材であり、☆☆☆ (62%) と☆☆☆☆ (64%) で多くの割合を占めていることがわかる。次に、身体表現の教材の割合が多く、全体で約23%であるが、☆では45%と最も多く、☆☆で22%、☆☆☆で18%、☆☆☆☆では11%と少なくなっている。器楽と鑑賞の教材は、全体で15%前後であるが、☆☆で器楽26%、鑑賞19%と他の☆本と比較して多くなっている。逆に、☆☆☆☆では器楽の割合が8%と少なくなっている。

7 教材選択の視点について

これまでの「教科書掲載教材の分析表」では、教材選択の視点として、季節、行事、遊び、生活、自然、生物の6項目に分類していたが、今回の「教科書掲載教材の分析表」ではその教材をどのような視点で取り上げるのか、単語や単文で示している。それらを集計して小分類してみたが、非常に多くの視点が記載され(各☆本で108~124)、分類も多岐にわたっていた(表2)。

最も視点の数が多かったのは、歌唱に関するものが各☆本合計187点であった。小学部用のおんがく☆~おんがく☆☆☆については、遊び、季節、行事、生活、自然などが選択の視点となっており、中学部用の音楽☆☆☆☆では、手話、日本の歌、日本の民謡、世界の民謡、英語・ドイツ語の歌などが選択の視点として示されていた。おんがく☆☆☆からは、交互唱、輪唱、エコーソング、合唱などの複数人で歌う形式が視点として示されていた。

次に多かったのが器楽に関する選択の視点で、各☆本合計85点であった。器楽に関する選択の視点とともに、リズム奏、交

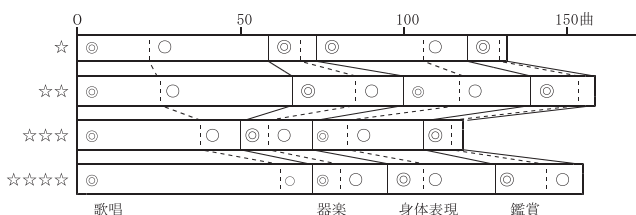


図6 各☆本の教材選択の主たる観点(◎)と合わせて観点(○)としている曲数

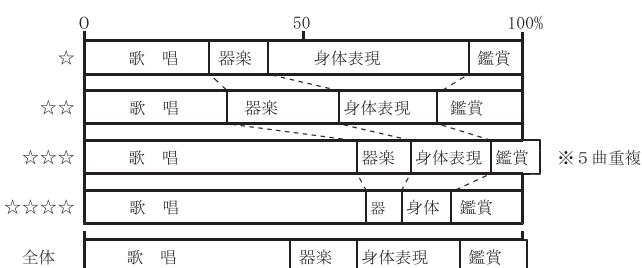


図7 各☆本の教材選択の主たる観点別の曲数の割合

表3 平成13年度版の再掲曲、平成23年度版の不掲載曲と新掲載曲の数と割合

	おんがく☆	おんがく☆☆	おんがく☆☆☆	音楽☆☆☆☆
H13年度版の再掲曲	44 (68.8)	53 (71.6)	36 (59.0)	68 (59.6)
H23年度版での不再掲曲	20 (31.2)	21 (28.4)	25 (41.0)	46 (40.4)
計	64 (100)	74 (100)	61 (100)	114 (100)
H13年度版の再掲曲	44 (60.3)	53 (67.9)	36 (59.0)	68 (65.4)
H23年度版での新掲載曲	29 (39.7)	25 (32.1)	25 (41.0)	36 (34.6)
計	73 (100)	78 (100)	61 (100)	104 (100)
増 (+) 減 (-)	+9	+4	±0	-10

互奏、合奏などが選択の視点として示されていた。おんがく☆☆☆では、リズムによって、始めと終わり、和音、音階、順次進行、効果音など、他の☆本ではみられない他の視点もあった。

身体表現に関する選択の視点は、各☆本合計55点であった。ジェンカ、白鳥の動き、ペアダンス、楽しく歩く、素早い動き、列車、跳ねるなどの具体的な選択の視点も示されていた。

また、物語、劇、鑑賞に関する選択の視点も多く、各☆本合計62点であった。鑑賞に関しては、情景、イメージ、ピアノ曲、オーケストラ、行進曲、室内楽、オペラ、バレエ、ロック、ラテン音楽、タンゴ、ジャズ、ウエスタン調などの具体的な視点があげられていた。おんがく☆☆☆では、感謝の気持ち、夢、元気、かわいらしさ、決意と希望、出発、日本の美、平和な世界などの美や感情などを表す視点がみられた。物語、劇、朗読などと関連した視点も、各☆本合計17点あった。

その他、おんがく☆では発声やコミュニケーションの視点が24点、おんがく☆☆では発語を引き出すという視点が3点、おんがく☆☆☆では交流や友だち、なかよし、なかま、クラスづくり、つながりなどの視点が17点あった。また、音楽☆☆☆☆では、創作と即興表現の視点が7点あった。

知的障害児を対象とした教科は、小学校、中学校のようにこれまでの文化や歴史から、系統的に整理された内容ではなく、生活に結びついた総合的な活動としての音楽であり、自然や生活、人間関係、自己表現、余暇、さらに自立活動と関連した領域をも視野に入れて指導する必要がある。その点からも、教材選択の視点が歌唱や器楽、身体表現、鑑賞といった領域と関連していることは当然であるが、音楽活動を中心に障害に対応した教材選択の視点が示されていることは重要なことである。

しかし、各☆本によって、教材選択の視点の表記の仕方や内容が大きく異なっている。学習指導要領の各教科・領域の目標と内容に照らし合わせ、整理する必要がある。また、教科書解説にある一つ一つの教材の「指導上想定されるねらい」「指導上の留意事項」「学習活動例」についても、「教科書掲載教材の分析表」との整合性を図ることによって、教材選択の視点の表記も整理されてくるのではないかと考える。

8 再掲曲・不掲載曲・新掲載曲について

☆本は学習指導要領の改訂に伴い改訂されているが、その際、古いと感じられる教材や使われることが少ないと思われる教材については、入れ替えの作業を行っている。平成13年度版の☆本に掲載され、平成23年度版の☆本にも掲載されている曲を再掲曲とし、平成23年度版の☆本では掲載されなかった曲を不掲載曲、そして、平成23年度版の☆本で新に掲載された曲を新

掲載曲として、集計した(表3)。

おんがく☆☆☆については、再掲曲が59%、不掲載曲が41%、新掲載曲が41%で、増減はなかった。おんがく☆☆については、再掲曲が71.6%、不掲載曲が28.4%、新掲載曲が32.1%で、新掲載曲が4曲増えていた。おんがく☆については、再掲曲が68.8%、不掲載曲が31.2%、新掲載曲が39.7%で、新掲載曲が9曲増えていた。音楽☆☆☆☆については、再掲曲が59.6%、不掲載曲が40.4%、新掲載曲が34.6%で、新掲載曲が10曲減っていた。

不掲載曲と新掲載曲のそれぞれの理由については触れられていないが、若干、平成13年度版で新掲載曲となった曲が平成23年度版で不掲載曲となった曲がみられた。おんがく☆では「アルプスの少女ハイジより『おしえて』」、おんがく☆☆では「はんかちのうた」「せんたくものごしごし」「かめのえんそく」「ちいさいかぜとくるみのき」、おんがく☆☆☆では「スキップ」「お月さまにかんぱい」、音楽☆☆☆☆では「わかくさいきき」「この広い野原いっぱい」「君に会えて」「鬼太鼓」「山道を行く」(グローフェ作曲)であった。

各教材の使用方法については、教科書解説に一つ一つ詳しく説明されている。しかし、各☆本で60~100曲もの教材が掲載され、教材選択の際に教科書解説をすべて読んで教材研究することはむずかしい。新掲載曲で、一般に知られた教材であれば使用することもできるが、初めて接する教材については、教材研究の時間がかかる。また、児童生徒にとっても、その教材のおもしろさや学習内容について理解し、楽しむことができるようになるまでには時間がかかる。新掲載曲については、次の教科書改訂までに、作成協力委員会を中心に実践し、効果的な活用方法などを確認できるようにしていくことが必要ではないかと考える。

V おわりに

2011年の特別支援学校学習指導要領に基づいて大きく改訂された☆本について、「教科書掲載教材の分析表」をもとに教材分析を行ったが、基本的には齋藤・星名(1996)が示唆しているように、子どもたちの認識や音楽の発達段階を配慮して作成されていると考えられる。しかし、2011年の改訂の基本方針にあるように、〈うたっておどって〉〈たのしいいちにち〉〈冬の音楽を楽しもう〉〈ひびきあいをたのしもう〉〈ひょうげんしよう〉〈みみをすまそう〉〈オーケストラの音楽をきこう〉〈物語と音楽〉など、身体表現や自己表現活動、創造的な音楽活動などを考慮した新たな教材を含んだ題材が示されていた。また、〈おととあそぼう〉〈みみをすまそう〉〈がっきをならそう〉〈えをみておはなしをきこう〉〈だがっきにちょうせん〉〈ひびきあいをたのしもう〉〈けんぱんは一もにかにちょうせん〉〈がっそうをしよう〉〈リコーダーで演奏しよう〉など、楽器を扱う教材を題材ごとに数多く示していた。

平成23年度版での新掲載曲も、おんがく☆では29曲(39.7%)、おんがく☆☆では25曲(32.1%)、おんがく☆☆☆では25曲(41.0%)、音楽☆☆☆☆では36曲(34.6%)と少なくない。平成13年度版で新掲載曲となった曲が平成23年度版で不掲載曲となった曲もみられることから、新たな視点で教材選択されていることが推察できる。

その点では、これまで教材選択の視点として、季節、行事、遊び、生活、自然、生物の6項目で分類していたが、今回の教材選択の視点では単語や単文で示されていて、非常に多くの視点が記載され（各☆本で108～124）、分類も多岐にわたっていることがわかった（表2）。そのなかで、交互唱、輪唱、エコーソング、合唱、リズム奏、交互奏、合奏、始めと終わり、和音、音階、順次進行、効果音など、他の人と一緒に音楽活動する形式について示されていた。また、物語、劇、鑑賞に関する選択の視点も多く、感謝の気持ち、夢、元気、かわいらしさ、決意と希望、出発、日本の美、平和な世界などの美や感情などを表す視点もみられた。

その他、発声やコミュニケーション、発語を引き出す、交流や友だち、なかよし、なかま、クラスづくり、つながりなど、自然や生活、人間関係、自己表現、余暇、さらに自立活動と関連した領域をも視野に入れて指導する必要があることが示唆された。

今回の☆本に掲載の教材分析をとおして、調性、拍子、速度、音域、教材選択の観点や視点などの分析から、教科書に掲載された教材は、小学部1～3段階、中学部1段階へと段階的に発展しているだけではなく、各☆本は題材ごとにまとめて掲載され、教材選択の視点は子どもたちの生活や学校行事に関連した内容をもちながらも、音楽活動の仕方などの音楽活動そのものに関する視点、感情や美などの情操に関する視点、自立活動に関する視点など、☆本の活用の幅を広げるものになっていると考える。

特別支援学校では「音楽」の授業以外にも、「朝の会」「帰りの会」などの日常生活学習、行事に向けた生活単元学習など、幅広く音楽活動が展開されているが、☆本に掲載された多数の教材も幅広い学習活動に対応できるものである。今後、さらに教材の持つ文化性や芸術性などの観点からの検討、教材を実際実践化してみでの検討、多様な集団を対象にした授業での生かし方等の検討が必要だと考える。

※この論文は、2013年8月に行われた日本音楽教育実践学会第20回全国大会において発表した原稿に加筆修正したものである。

文献

- 文部科学省（2002a）おんがく☆ おんがく☆☆ おんがく☆☆
☆☆教科書解説．東京書籍．
- 文部科学省（2002b）音楽☆☆☆☆教科書解説．東京書籍．
- 文部科学省（2012a）おんがく☆ おんがく☆☆ おんがく☆☆
☆☆教科書解説．東京書籍．
- 文部科学省（2012b）音楽☆☆☆☆教科書解説．東京書籍．
- 齋藤加代子（1996）精神薄弱養護学校「音楽」教科書使用の現状と課題．埼玉県立南教育センター紀要，9，60-63．
- 齋藤一雄（2003）養護学校小学部用音楽科教科書の分析．学校音楽教育研究，7，189-193．
- 齋藤一雄（2005）養護学校音楽科教科書の活用調査．発達障害研究，27(2)，147-152．
- 齋藤一雄・星名信昭（1996）養護学校小学部用音楽科教科書の教材分析．上越教育大学障害児教育実践センター紀要，2，26-36．